

## 不易と流行



大 橋 秀 雄

東京大学, 工学院大学名誉教授

ここ十年ほど畠山文化財団<sup>1)</sup>の理事を務めている。年に二三回開かれる理事会に出席するため、港区白金台にある畠山記念館を訪れる。数段の石段を登って邸内に入ると、鬱蒼とした古木に覆われた歩道が本館玄関まで続いている。道の傍らには行幸記念碑などが並んでいるが、やがて二つの胸像が来訪者を迎えてくれる。畠山一清創業社長<sup>2)</sup>と、その恩師井口在屋教授<sup>3)</sup>である。まだ50代に見える社長像は、私がお目にかかった白いあごひげを蓄えたお姿とはかなりイメージが違う。井口教授は私が生まれるずっと前に亡くなられたが、東大機械工学第三講座(水力学)の初代教授を務められた。ののくち式ポンプが荏原製作所創業の起点になった縁で、師弟の関係を越えて創業のパートナーとして遇されている。私はその講座の5代目の教授を務めたが、退職と同時に旧来の講座制は廃止され、大講座制へと移行した。井口教授の胸像の前に立つと、100年近く続いた講座が消滅した現実がのしかかり、そっと「沈む船と運命を共にしました」と呟いて頭を下げる。

茶道具や関連美術品を展示する本館の玄関は和式で、靴を脱ぎスリッパに履き替えて中に入る。一階の一番奥の正面に、畠山一清翁の等身大の木彫像が来訪者と向き合うように置かれている。文化勲章を受章した平櫛田中が一本の楠から削りだしたもので、能衣装の翁が片膝を立てて座り、まさに仕舞が始まろうとする一瞬の姿を捉えている。その正面に立つと、目線の高さが同じになり、ちょうど見つめ合う感じになる。お顔は、私が若い頃にお目にかかったときの印象そのもので、殿様という表現がぴったりの風格と存在感が、まるで生きている人のよ

うに伝わってくる。その存在感の核心にあるもの、人格というべきか魂というべきか、それが企業経営から茶道、能楽、美術品収集まで一貫して貫いてきたのだろう。創業者と、誰もが何時でも、これほどの迫力で向き合える企業は外に知らない。

翁と向き合っていたとき、ふと「不易と流行」という言葉が浮かんだ。これは松尾芭蕉が俳句の極意を説くために使ったと伝えられているが、翁が愛した茶道や能楽の世界でも同じことだろう。それどころか、不易と流行は、芸道を越えて経営や技術にも通ずる普遍的真理を宿している。

不易とは変わらぬ価値、技術でいえば原理や基本を指している。流行とは、新しいものを取り入れる意欲、革新を指している。不易に固執し続けると、進歩が止まる。流行を追いすぎると浮き草になり、ときに流されて消えてしまう。不易と流行のバランスを保つこと、いやそれを越えて不易と流行を競い合わせることに、その中に経営でも技術でも、持続的発展の神髄があるのだろう。

一清翁が設立した畠山文化財団は、科学技術と芸術・文化の振興のために多くの助成事業を続けている。われわれに関係深いものとしては、日本機械学会畠山賞、日本発明協会畠山一清賞(恩賜発明賞受賞者)、ターボ機械協会畠山研究助成金などがある。機械学会の畠山賞は、大学、短大、高専の機械系学科を首席<sup>4)</sup>で卒業するものに与えられ、1960年に始まって以来1万3千人を越える受賞者を世に送り出した。賞の説明文は次の一節で結ばれている。

「卒業する皆さんは、機械工学の初歩を学んだのでは

なく、基礎を学んだと自負してください。科学技術の新しい発展は、すべてその基礎の中から生まれてきます。ですから、皆さんがたすべてに、発明・発見や創造のチャンスがあります。学業優秀にとどまらずベンチャー精神まで磨いて欲しい。これがこの賞に込められた畠山一清氏の思いでもあります。』

正直申し上げると、この説明文は私が起草した。同級生や教え子たちを見ていると、卒業成績と世に出てからの達成度はあまり相関がない。知識を理解する力より、知識を生み出す力、リスクを恐れずチャレンジする勇氣と執念、人の輪の中心に立てる包容力、それらが後世に残る偉業を達成するより大きな要素だろう。一清翁もそう思っているに違いない。その思いをこの一節に託した。

この目まぐるしい世の中であって、畠山記念館には不思議な時間が流れている。迷いがあったり、気が挫けそうになったら、あの木彫の前に立ってじっと翁のお顔を見つめるといい。流れる時間のテンポが一気に変わり、歴史の流れの中に身を置く自分を強く意識するようになる。短期の

煩悩に振り回されずに、不易の大義に立ち戻るゆとりを取り戻すことができるだろう。

荏原製作所は創業以来100年を越えた。その間に戦争もあり平和もあり、多くの経済の浮沈を経験し、それを乗り越えてきた。企業の持続的発展には、時代の変化に即応しながら革新を続ける力と、拠って立つ基盤を堅く守り通す意地の双方が求められる。不易と流行、創業者が身を以て示したその見本が、畠山記念館の中に今も生きている。

- 1) 1960（昭和35）年に、教育・学術の発展、産業振興、文化の進展を図るため設立された公益財団法人
- 2) 1881 - 1971（明治14 - 昭和46）はたけやま いっせい、東京帝大機械工学科卒、荏原製作所創業者、能登七尾城主畠山家に連なる、雅号即翁
- 3) 1856 - 1923（安政3 - 大正12）いのくち ありや、工部大学校卒、東京帝国大学機械工学科教授、のくち式ポンプの発明者
- 4) 2001年以降、学科の大きさに応じて100人に一人を目安に推薦を受けている。受賞者は毎年350人前後

